

蠶 絲
×
建 築

位置 東京市麴町區有樂町一丁目七番地
建築面積 661.762 平方メートル。
建築面積 593.393 平方メートル。
總延坪 3,884.108平方メートル。
軒高 地盤面上屋階バラベツトまで25.850
メートル。地盤面上最高は塔屋バラベツトま
で33.350メートルである。

各室配置 地階は食堂、休憩室、調理室、
廣間、變壓室、排風機室、汽罐室、ポンプ室、
動力係員室、物置、便所、下足室。

一階は玄關、廣間、事務室、豫備室、便所、
二階は貴賓室、同次の間、事務室、書庫、
便所など。

三階は事務室、集會室、便所、物置。
四階は講堂、遊歩廊、休憩室。
五階は講堂上部、便所、廊下。
六階は講堂上部（ギャラリー）映寫室、休
憩室など。
七階はホテル受付、和洋寢室、食堂兼娛樂
室、浴室、便所、リネン室。
屋階は水槽室、昇降機及リフト機械室。
基礎 地下地盤面下4.30メートルまで總掘
りとし、50尺の松杭を打つて、その上に總床
版式鐵筋コンクリートを施した。
主體構造 建築の主體は主として鐵骨鐵筋
コンクリート構造であるが、一部は鐵筋コン

背 面



會 館

×

概 要

クリートとした。コンクリート打ちには、和蘭園インターナショナル・セメントガン株式会社製のポンプクリートを使った。この機械はリフトも、シュートもカートも不要で、コンクリート作業を著しく簡便化した。ポンプクリートによる建築は我國ではこゝが最初である。

様式 凡そ現代の建築に様式を附するのは愚かしき業だが、明快にして清楚な感じを出してゐる。強ひて云へば近代様式。

外装 北側及東側即ち道路に面した側の外装は、地盤から一階窓上端まで長野縣諏訪産の鐵平石を水磨き仕上げとして貼り、二階以

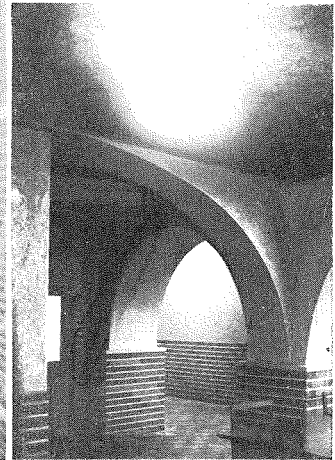
上七階までは日本陶業株式会社製白色擬石タイル貼り、北側玄関出入口廻りは岩手縣折壁石を貼りつけ、入口沓石、段石及び手摺石には茨城縣稻田産花崗石を使用した。

南側及西側は一階より塔屋まで白色セメント海綿小叩き仕上げ、各窓並に出入口及手摺は鋼鐵製で、ペンキ塗又は銀色スプレー仕上げである。

内装 地階食堂及び休憩室は、床を日本陶業製半磁器タイルを黄色と薄墨色で市松張りとし、腰は藥かけタイル、壁及び天井はラフコートペンキ塗仕上げで、料理室は床が寒水石研ぎ出し、腰モルタルカベツクス塗、天



昇降機前廣間



地階

井 plaster 塗上げである。

一階及地階の昇降機前廣間は、床モザイク
タイル貼、壁も同じくモザイクタイル貼りで
天井は plaster 塗である。

一階玄関は床モザイクタイル敷、壁東京府
青梅産の青梅石張り、天井は plaster 塗
ペンキ仕上げである。

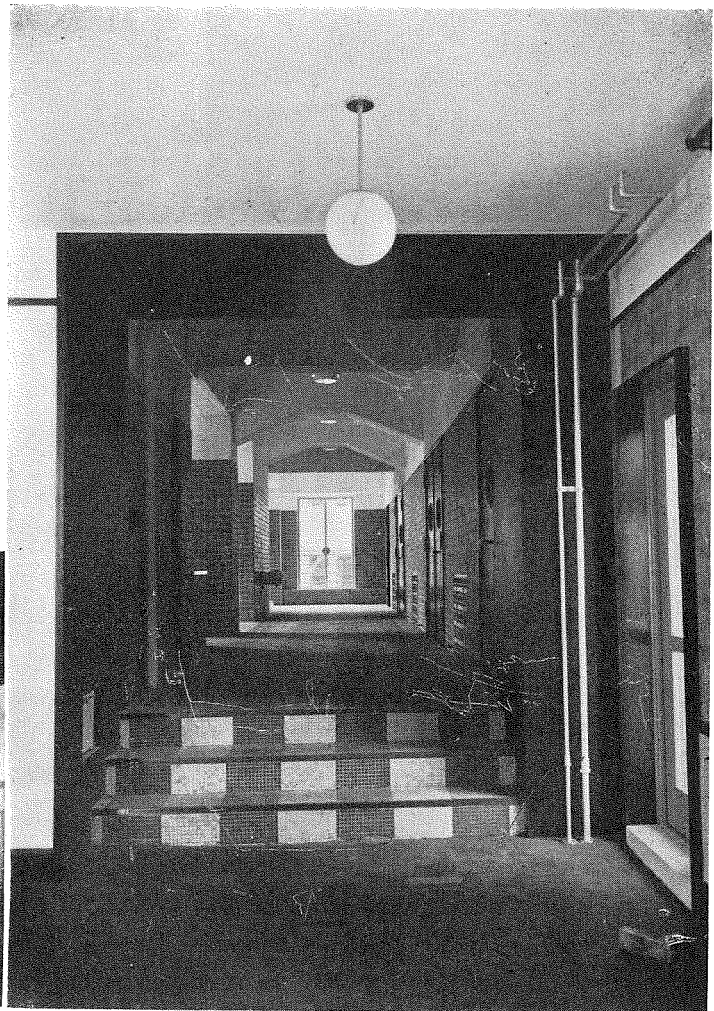
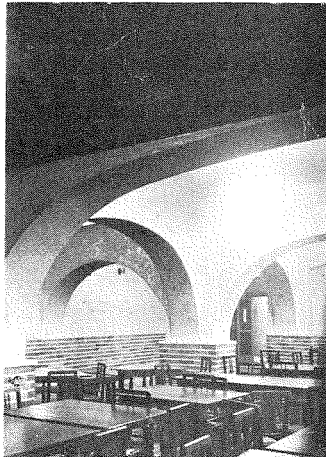
二階の貴賓室は床が檜の寄木張り、腰羽目
巾木はチーク材、壁天井は plaster、ペン
キ塗叩き仕上げで、彫刻部は石膏ペンキ塗り
拭きとり仕上げ、同じく次の間は床がフロア
リングブロック敷、壁サルブラ貼り、天井
は plaster ペンキ塗り叩き仕上げである。

四階講堂は、床がフロアリングブロック敷
ギャラリーの床はソーロイド塗、腰羽目及舞
臺廻りはラワン材ラック塗又はペンキ塗仕上
げで、壁及天井は plaster 塗ペンキ仕上
又はトマテツクス張り、トマテツクスの押椽は
クローム鍍金眞鍮板を使つた。遊歩廊は床
モザイクタイル、腰藥かけタイル貼り、壁天井
 plaster 塗である。四階及六階の休憩室は
床フロアリングブロック、壁サルブラ貼、幅
木笠木がラワン材ラック塗で、天井は plaster
塗仕上げである。

七階ホテル廣間は幅木腰羽目ラワン材ラック
塗仕上げ、壁天井 plaster 仕上げ、寢室

六階遊歩廊

食堂



は日本間は入口土間大磯砂利洗出し、床畳敷き、壁色漆喰又は茶根岸仕上げ、床の砂葦は金蘭仕上げである。洋室の床は米松椽甲板張り、幅木タンギール材ラック塗仕上げ、壁天井プaster塗、食堂兼娛樂室は、床がアトリス、幅木人造石研ぎ出し、腰、壁、天井はプasterペンキ塗仕上げである。

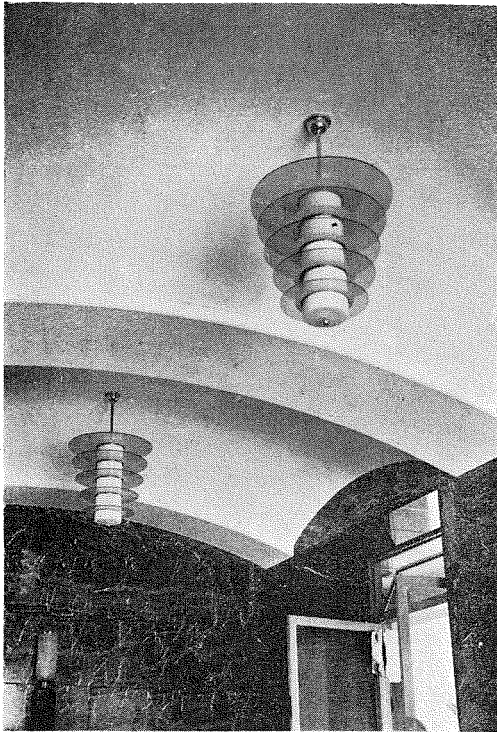
一般廊下及廣間、階段室は床と幅木を人造石研ぎ出し、腰セメントプasterカベツクス塗、壁天井プaster塗、七階ホテル廊下は床がソーロイド塗、幅木人造石研ぎ出し、腰ペンキ塗、壁天井プaster仕上げ、その他各階事務室、新聞記者室、豫備室等は、床が

コンベス又はソーロイド塗、幅木人造石研ぎ出し、壁天井プaster塗仕上げである。

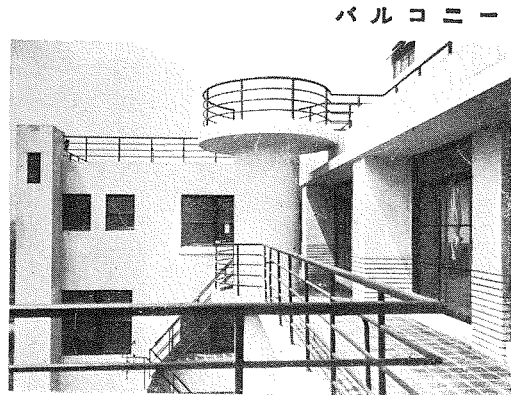
昇降機 カースキツチ式積載能力 1,000 疋速度毎分65メートルの客用昇陽機二臺と、料理用の積載能力60疋、速度毎分20米の電動式リフト一臺を設備してゐる。

衛生設備 地階、一、二、三、四、五及七階には大小便所及手洗所を設け、大便はフラッシュバルブ、小便はシスターン式の、何れも水洗式によつて地階汚水槽に排水し、揚水ポンブによつて市の埋設下水管へ放流する。

給水給湯設備 各洗面所及二三、七階の湯沸場には市の水道水を供給する。そのために



玄關天井



屋階に貯水槽を備へ、タービンポンプで揚水する。便所その他の雑用水としては井水を使用する。これがためには地階ポンプ室に深井戸用ボアホールポンプを備へ鑿井より汲み上げて一旦地階の井水貯水槽に貯水し、更に之をタービンポンプで屋階の井水槽に揚水する。鑿井揚水量は一晝夜 3,000 石である。各湯沸場及び七階浴室等にはジュピター即時湯沸器を取り付け、瓦斯により常時給湯の設備をした。

煖房設備 真空重力併用低壓式蒸汽煖房装置で、地階機關室内に前田鐵工所製分割型蒸汽罐二臺（放熱面積 12,000 平方呎）を備へ、各室に配置するエロヒンヒーター五細柱型、二細柱型、壁掛型放熱器に送汽し、室内を所定の温度に温める。燃料としては粉炭を使用するので、自動式ストーカーを据付けて粉の完全燃焼を計る。

換氣装置 地階各室及び四階集會室には機

械的換氣装置を施し、それぞれダクトによつて地階及び屋上に配置してある排風機室に導きマルチブレード送風機によつて屋外上部に排氣する。

電氣設備 地階變壓室に 3,200 ヴォルトで供給をうけ、變壓器六臺で變壓して、電灯及び動力用に送電する。尙映寫機用として水銀整流器を設備した。

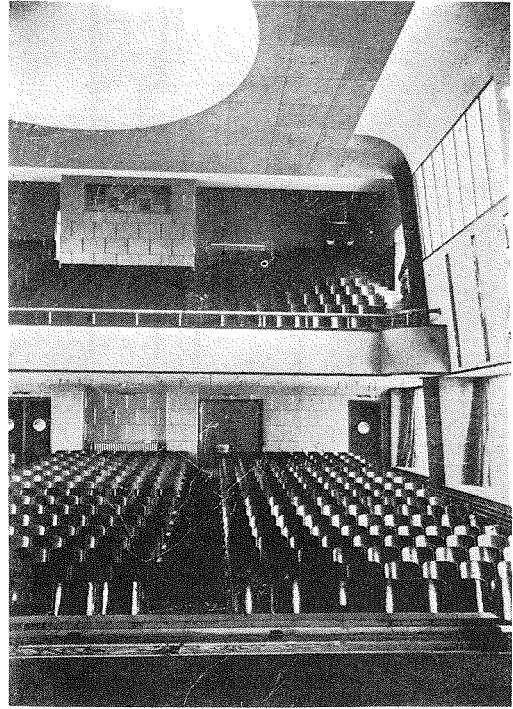
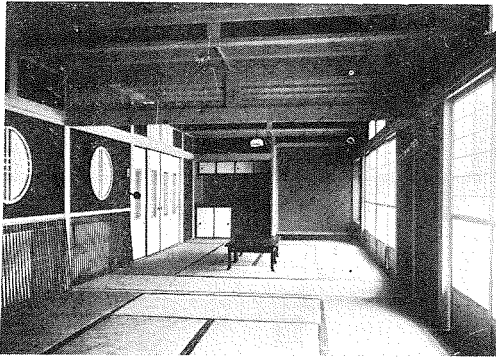
弱電設備 電話及び非常報知器等弱電用の電源として、地階蓄電池室に蓄電池を設備した。

舞臺裝置 四階講堂（定着座席 725 人）の舞臺にはボーダーライト、フットライト及びスポットライト等を設け、舞臺脇に備へたデキンマーによつて操作し、客席調整照明はオートトランスによつて調整する。

メールシュート 昇降機前廣間に七階から地階に亘つて日本建鐵會社製メールシュートを据付け、地階にメールボックスを備へた。

講 堂

日本間寢室



設計及監督 山下壽郎建築事務所

建築請負 株式会社 大林組

附帯設備 煖房及び換氣工事は大阪煖房會社、昇降機は日立製作所、衛生消火設備が三機工業會社、電氣が豊國電氣工業所、特殊照明器具東京工業所、電話が日本電氣株式會社である。

工程 昭和七年二月二十四日に地鎮祭を舉行し、同三月十五日に起工、昭和八年三月三十一日に工事が終了して、四月二十四日竣功式を舉行した。

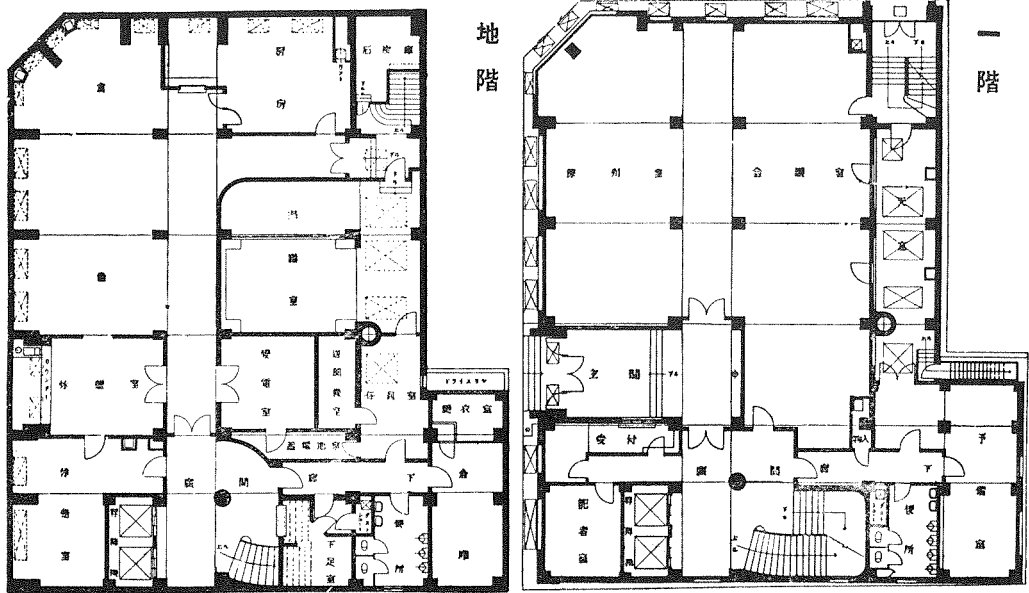
×

蠶絲會館は、窓が大きくて、割合に凸凹が多く、どこか中央郵便局に似た感じをもつてゐる。それは、外装の白色タイルと、黒い窓枠との對照のためばかりでもない、そこには光りがありあまつてゐて、或る種の人々は落ちつけないであらうと思はれる程明るい。自然新鮮な感じを與へるわけである。片假名で

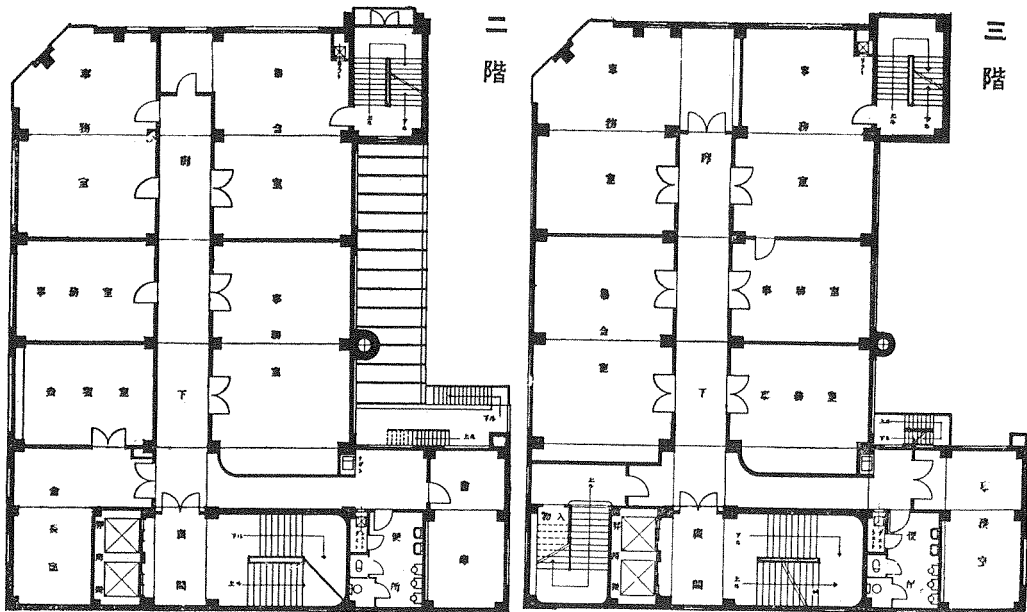
書いたモダンと云ふ言葉は、われ等の輕蔑してやまぬところだが、これは極めて好い意味での近代的建築だと云へる。設計の大膽さ、デコレーションの鮮かさ、全體として調子が揃つてゐるのはうれしい。裏側の避難階段から煙突の邊へかけての調子は、何れ早晚建てられるであらう隣接地の建築にかくされてしまふらしいが、惜しいものである。

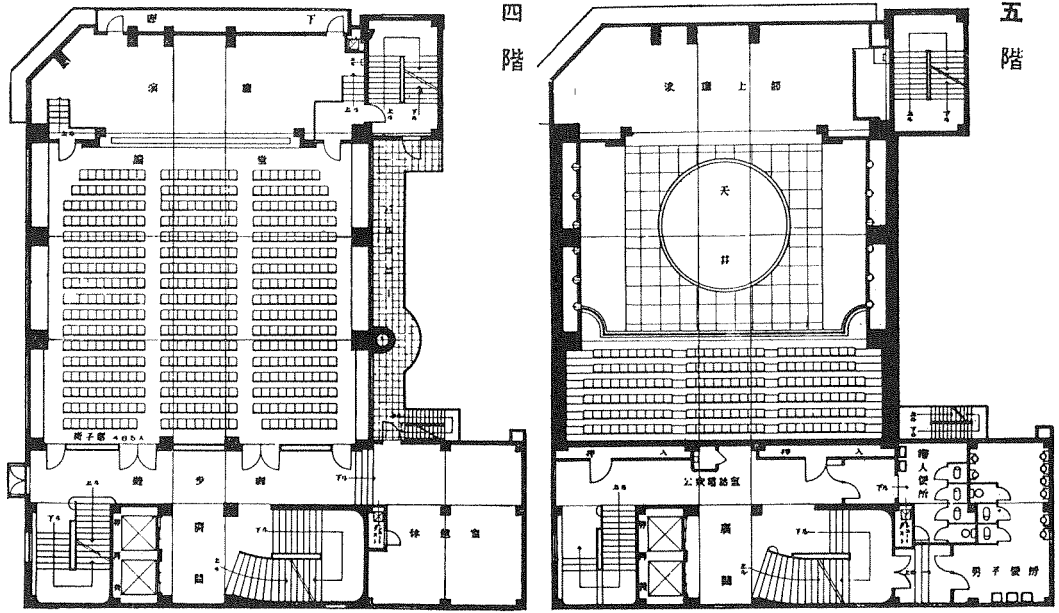
敷地一ぱいに建てられたこの建物は、しかし無理な處が見えない。外觀が既に評判である様に、この邊一帶の軟弱地盤にも拘はらず竣功後の今日でも、少しの沈下も見られない點でも亦珍らしとされてゐる。

蠶絲會館は、省線有樂町のホームからも、日比谷公園の一角からも眺められる。そしてもはや人の目になれてしまつて何等の感興もわかさない丸之内一帶の洋館建築の間にあつて、たゞ一つ、明快な、すつきりした新時代的光彩を放つてゐる。



蠶 絲 會 館





平 面 圖

